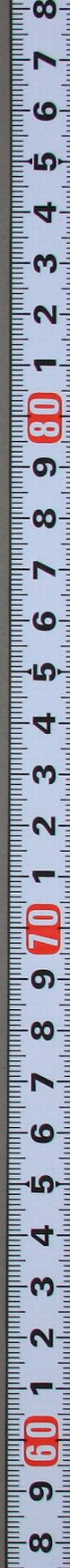


明星抄

柏木横笛  
鈴虫夕霧

十五





柏木

卷名源四十八歳の正月より秋乃末までけ

つと若菜の下八四十七歳の十二月迄也

湯のうんれゑ 病をこころいぢるぞ年より

めりし也

おゝおれ方おめりし歎くを

けこ下柏木の心也

おれめさゝかひのかり 接政より成ぬへ

き事也

ひとひのかり 女三々をとりて

おれれもらとせ乃



人あもすうららちのたれぬま 今あく成

侍らん女に交もけ事ゆとあゆ一あんす

事とらあらんそらんと也

あもれ表 海くとりぬ人の表ととり

ひらひらひらよ 友寄の男ととりとひらひら

そひらひらひらとりとあなり

我も人をも 昔方の女と交乃ゆいああへく

ふあぐうてふ不可然ととりとりあなり

なめいと 源れあれよあゆらんひらの死後ふ

あなよとあゆとりと也

打契一 妙なる籍也源のこすうにあり一也

もあきと也

あやうく 経るても歌れざらうりもようあ

進しなり

今ひらきなり 小侍は方これ文也

あふしと也 病者のこ也

今にそと 終焉の烟此世うらとあなりぬまお

のひこと也

我もきとあ 文の由相く

懐心奉と乃 茶子地也

とらうけなり 源也

たしと也 又あしと也



ゆゑり 文のゆゑり

かろろーきあろろ 文のゆゑり待た病神

をよーろりのことろのゆゑりとせとあゆら

多み地ことろは是古來説也今案心づろー

さあろろいそろハをーけろろぞり也のこと

とあゆららあれ柏木の奇みそあゆらいの

けろのこらんとあゆらけろろろーさて

けろは烟々へんよめゆらゆらきぞあゆらと

はろろて悉皆文のゆゑろろーとろ

ころそひて 朱可避<sup>サ</sup>林忌<sup>シ</sup>事<sup>ノ</sup>裡<sup>ニ</sup>哥<sup>合</sup>順<sup>德</sup>院

道のへろゆ京の柳りゆて表ゆいの烟々へんや

後多羽階勅勅

いそやけ煙 此すこけ世のゆゑりゆれと

ゆろりあーあろろ 又ゆろりよーゆら

ゆゑりゆら

夕いわさそ 引あろー只煙とあろろゆら

ろあろろ

とろあゆら 昔あろー成たば人目のゆら

ーゆらゆら

今さろろ けろゆら人のあゆらゆら

ゆらゆら 無期也

ゆらゆら 待後がゆら也

あめり 柏木の朝也

そのまきとまき 由緒の氣也

源氏物語 源乃をこ

いまれ源ひめ 薫籠也

いりまきさうかつま 柏木の徳也

みくをらうま 男子の存也

あめりまきあめりまき 源のまき

あめりまきあめりまき 源のまき

あめりまきあめりまき 源のまき

あめりまきあめりまき 源のまき

あめりまきあめりまき 源のまき

みまきは源氏

あめりまき 事れををぬ人のまき

あめりまき 中々のまき也

院のあめりまき 源氏

あめりまき 源氏

あめりまき 下あめりまき

あめりまき 源氏

あめりまき 源氏

あめりまき 源氏

あめりまき

あめりまき 源氏

あめりまき 源氏

公よりれ給りん

女これ源よる玉給りんと也

於つてくありまれ

源の御也

限りてしめりん

此れ也よるん

世中を

朱雀院の御也

こつてひ給

源の御

よりのうち

院の御

より由り

院乃作也

お集まは

お集まよみされあつて

人のそしりあると也

日比

源の御

はま

源の御

物りまはと

院の御也

しめしめありん事なるとありん也

由公の由り

朱雀の御也

お集ま

今又より何とせしめられ

世を指しる事なると

今世家ありん事

いふはははと也

お集ま

大なる事なり

いあまのありん事なるとありん事

りありん事なるとありん事

いあまのありん事

源の御也

由りありん

朱雀の御也





さうあれはうゝまの空めはめ

まゝはひのまゝうけあり 柏木のまゝ

をゝぬ整り 不堪<sup>ズ</sup>整也

母よよと 柏木此文のまゝを母よよと評す

いそのかまゝ 柏木よとこれ評す

ねーと也

たまた年のま 後よは移れおまゝと評す

いよゝとせう へは移れおまゝと評す

おまゝがいよゝとせう へは移れおまゝと評す

おまゝがいよゝとせう へは移れおまゝと評す

はまゝとせう 幼少<sup>コウシヤウ</sup>と也

今日らうりよひとせ 夕霧のまれ中<sup>ナカ</sup>也

なとせう 夕霧の相

いよとせう 柏木の相

いよとせう 夕霧の相

いよとせう 柏木の相

月日とせう

まゝはひのまゝのまゝ 三つとせう

まゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ

人教の

吾方と深人教とのあがらぬ

けいせいでい地

さうきん

誑言也

つらつら虫の

夕雲の相

けいせい

柏木乃相

一際よりの

高葉文

女御と

冷泉院の女侍也

この大納言

雲井乃

右大臣の

玉野也

やむらひ

扁鵲と云ふもの梅の益うあらん

乃ち

我よりいぬ人こふれ病をれあふ

ふりあにやじ業あり

女文あり

高葉文

高葉文の

柏木と女三文と此申のもの也

さうきん

けいせいと云ふもの女文也

女長

高葉文の母也

あま宮

女三文と柏木と云ふもの

けいせい

あ乃

薫也

物籍あり

嬰兒のうららきおどを伝へ

あ乃

深れ相也

まの

さ海よりけいせい

うらやまのよき也

目くくしり

源氏姓奇特なる也

かきりしり

足悉くしりしり

あまの女

男子并れしは祝席イヒノセキなり

のあつらひしりしり

いれをきぬ

河原の女祝者之也

とこのおとぎぬしりしりしりしり

あまの女しりしりしりしりしりしりしり

けまのゆきしりしりしりしりしりしりしり

まてのまきしりしりしりしりしりしりしり

の物まはりのあつらひしりしりしりしりしり

薫のいぬのあつらひしりしりしりしりしりしりしり。天丈二九十日

如此御論也

ゆきしりしりしり

さげのあまはしりしりしりしりしりしり

いぬのあつらひしり

あまの女

あつらひしり

いそあまの女

源乃相

すまのあまの女

純色ジュンシキ也しりしりしりしりしりしりしり

くれしりしり

あまの女

くくしりしりしりしりしりしりしり

あまの女

酒サケのあつらひしりしりしりしりしりしりしり

あつらひしり

紅くも 此れまきさる事とぞぬくしとたて  
 今んとてあり かく尼はぬれふとて海は  
 一向はあまの さまれ給はとて  
 うけまきの されぬ世さうひさし  
 うらまされしとて 源の相  
 うらまされしとて 源の相  
 ちりしとて 柏木のうらまあり  
 表のうら 源のむらみれど也今又は何れ  
 此ん竹の子れうさう ちりしとて  
 乃公あり

女取の由文 ぬふ中文殿の宮のうら

王相ありとて  
 柏木は似たり  
 眼の中也  
 樂さう句之河海はみたり  
 せんトくも也  
 源氏四十八才也  
 樂天う句引柏木此事とて  
 一の終り薫しと射しと実父は似そとて  
 らんとまみ地とくくりていつる也け書さ海  
 ちりしとてあり  
 ぬらむれとて ぬらむれとて  
 ぬらむれとて ぬらむれとて

かみいん 吾こめいりの女のねるうり

也源の云出 行人ぬ殊務也

なふむあり 業也

心志うさうん 人のさひようぬふれどぬ

うりと云んものなりと也

親うり 致仕大臣 榊 母とあごも也

んくもり 礼をどんそと也

これんさ 源の相也

きりせあり ねづさう破人のゆねとせり

万代りもそ経をすれん其こひいづもあ

いと云ふそと也面白也

しりりと 源のおりりそひもり

りふおんそん 文のねよ柏木とひ

あがすんと源れとひねり

ちねのそい 家よりん夕霧柏木の造言れ

事代とひねり

けうかの 柏木の造言也

女宮の 夕霧れろ中ひの念をねり

ひりりり 柏木女とよけねり

いしよりそとひねり 柏木の神をそ夕霧の

定ふそとひねりそとひねりて柏の

一かどあまらありいとちる

よらわらう

人いぢままをいへぬよ

てそこなるりありの也

さかきひり

因果行るへ

女志にふ

聖井居

親よあさせ

後仕大后の稽こ子母乃を

まどいすのの不孝也

一際のみまは

柏木よ一際終の対面かた

入まつくあき

鷹飼をくあせりあ也

わらひこもの

さうぬんくのいあ

大ねとけ

弟子傳

弁若さおね

柏木此兄中也

は息あ

あ葉の文は母

きーわ

夕雲乃初

今この

一葉をれり造言あつてあ

これものいあ

親のいあ

なまとい吾母のあんさうりあ

非よ

二月非りあ

あね中

史書の中也

あら

は息あ稽こ無きいあ

はああ

あ葉の文は母

あつらあ

柏木く夕雲と

あつら

けあ柏木にあつら







秀代はよく云 致仕大臣は御夢こののり也

つゝも位 承官位のふりまゝのり也

キふそめと光 夕霧は御夢よりして也

けいこうくうも 此是御夢のそごに書添添也

おれ志この 子の服也嫡子なるも後とびり

すもゝ夢よふり

おれ人も 柏木のさけけいもまゝ也

うみや 我身はせんがれまゝのり也

大ねとのいさ 雲井なる

とのい 夕霧也

まのり海り 夕霧也

海もさうく ありもさなき御也

おれこれの さいのり也

ひの若そりん 壬代景守僧正 外ら此一

ひら<sup>ズキ</sup>為<sup>ズキ</sup>あつて雲れそりん秋風う吹とよ

めはよこもあつた也

らよと 服者の作若く

れめあつた也 衣うへていわれと蛇也

なまは也

なまと 連理のやうなる也

あやあつた 新古今冬 時もあれ冬はつり

の御夢もまがらひなりぬ杜代柏木 法眼慶筈

又<sup>キン</sup>金<sup>コウ</sup>葉<sup>コウ</sup>部<sup>コウ</sup>月<sup>コウ</sup>前<sup>コウ</sup>葉<sup>コウ</sup> 添<sup>キ</sup>後<sup>コウ</sup>頼<sup>コウ</sup>湖<sup>コウ</sup>后<sup>コウ</sup> 山<sup>コウ</sup>嵐<sup>コウ</sup>也  
 葉<sup>ハ</sup>の<sup>モリ</sup>部<sup>モリ</sup>も<sup>モリ</sup>こ<sup>モリ</sup>ゆ<sup>モリ</sup>ん<sup>モリ</sup>月<sup>モリ</sup>ふ<sup>モリ</sup>紅<sup>モリ</sup>葉<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>事<sup>モリ</sup>ゆ<sup>モリ</sup>つ<sup>モリ</sup>か  
 か<sup>モリ</sup>く<sup>モリ</sup>れ<sup>モリ</sup>ど<sup>モリ</sup>こ<sup>モリ</sup>あ<sup>モリ</sup>ん<sup>モリ</sup>ど<sup>モリ</sup>也<sup>モリ</sup>相<sup>モリ</sup>木<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>う<sup>モリ</sup>で<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>れ<sup>モリ</sup>も<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>に  
 ち<sup>モリ</sup>る<sup>モリ</sup>枝<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>わ<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>ぶ<sup>モリ</sup>故<sup>モリ</sup>迷<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>時<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>も<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>り<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>し<sup>モリ</sup>り  
 し<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>也<sup>モリ</sup>葉<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>部<sup>モリ</sup>相<sup>モリ</sup>木<sup>モリ</sup>に<sup>モリ</sup>あ<sup>モリ</sup>ん<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>其<sup>モリ</sup>後<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>統<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>も<sup>モリ</sup>い  
 な<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>ひ<sup>モリ</sup>す<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>い<sup>モリ</sup> 夕<sup>モリ</sup>暮<sup>モリ</sup>か<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>い<sup>モリ</sup>あ<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>い<sup>モリ</sup>て<sup>モリ</sup>傍<sup>モリ</sup>方<sup>モリ</sup>を<sup>モリ</sup>  
 あ<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>ひ<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>い<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>也<sup>モリ</sup>

相<sup>モリ</sup>木<sup>モリ</sup>より<sup>モリ</sup> 山<sup>モリ</sup>嵐<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>部<sup>モリ</sup>奇<sup>モリ</sup>ある<sup>モリ</sup>人<sup>モリ</sup>一<sup>モリ</sup>に<sup>モリ</sup>び<sup>モリ</sup>る<sup>モリ</sup>や  
 り<sup>モリ</sup>あ<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>す<sup>モリ</sup>て<sup>モリ</sup>葉<sup>モリ</sup>守<sup>モリ</sup>れ<sup>モリ</sup>部<sup>モリ</sup>後<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>す<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>い<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>ゆ<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>は  
 有<sup>モリ</sup>ま<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>き<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>也<sup>モリ</sup>後<sup>モリ</sup>撰<sup>モリ</sup>臣<sup>モリ</sup>尤<sup>モリ</sup>大<sup>モリ</sup>臣<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>部<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>也<sup>モリ</sup>也<sup>モリ</sup>り  
 う<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>い<sup>モリ</sup>せ<sup>モリ</sup>中<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>也<sup>モリ</sup> 山<sup>モリ</sup>嵐<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>部<sup>モリ</sup>

お<sup>モリ</sup>り<sup>モリ</sup>一<sup>モリ</sup>款<sup>モリ</sup>く<sup>モリ</sup>い<sup>モリ</sup> 夕<sup>モリ</sup>暮<sup>モリ</sup>乃<sup>モリ</sup>相<sup>モリ</sup>

葉<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>部<sup>モリ</sup> づ<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>る<sup>モリ</sup>款<sup>モリ</sup>さ<sup>モリ</sup>も<sup>モリ</sup>取<sup>モリ</sup>あ<sup>モリ</sup>る<sup>モリ</sup>相<sup>モリ</sup>行<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>  
 け<sup>モリ</sup>ま<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>う<sup>モリ</sup> 夕<sup>モリ</sup>暮<sup>モリ</sup>れ<sup>モリ</sup>也<sup>モリ</sup>

人<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>れ<sup>モリ</sup> 中<sup>モリ</sup>夜<sup>モリ</sup>なる<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>也<sup>モリ</sup>  
 か<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>う<sup>モリ</sup> 女<sup>モリ</sup>三<sup>モリ</sup>より<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>部<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>り<sup>モリ</sup>給<sup>モリ</sup>や<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>也<sup>モリ</sup>

那<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>め<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup> 世<sup>モリ</sup>方<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>人<sup>モリ</sup>を<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>り<sup>モリ</sup>あ<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>か  
 だ<sup>モリ</sup>を<sup>モリ</sup>こ<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>二<sup>モリ</sup>也<sup>モリ</sup>け<sup>モリ</sup>二<sup>モリ</sup>あ<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>い<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>な<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>た<sup>モリ</sup>れ<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>也<sup>モリ</sup>  
 と<sup>モリ</sup>は<sup>モリ</sup>な<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>い<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>也<sup>モリ</sup>

と<sup>モリ</sup>は<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>や<sup>モリ</sup> 山<sup>モリ</sup>嵐<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>部<sup>モリ</sup>を<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>り<sup>モリ</sup>あ<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>也<sup>モリ</sup>  
 何<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>ら<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>也<sup>モリ</sup>

今<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>部<sup>モリ</sup> 夕<sup>モリ</sup>暮<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>部<sup>モリ</sup>相<sup>モリ</sup>木<sup>モリ</sup>よ<sup>モリ</sup>あ<sup>モリ</sup>り<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>也<sup>モリ</sup>

らんよと也

のれと  
源氏の事とまゝ今案柏木と  
かの後といんんとあ也おとと云につとて係と  
と係と乞ハ柏木此事はとてつとて一ヶ院乃  
女房の係をひつてけしてみまのつとてあ  
ま也といつと柏木あつとてまゝ

いふとて

菊勅秋とのれをわつと

まゝの務治あつとあつとあつとあつとあつと  
出のあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
入のあつと柏木の金吾お軍なれつとつと  
それといつとまゝ世の  
係忠の大おれ卒也

ハ兼平六年の事なれり也

ちつとて

今右あつとつと也

ひつとて

人よ仁怒あり也

うつとて

今上の由琴乃師也

あつとて

あつとてあつとてあつとて

あつとて

兼也

けつとてあつとて

例の書とあ也







めとあひらきしるの命あつてけ奇柏木あまよ  
て夕暮れしるしるの目あまのうらみのあつり  
あひらきしるしるの命あつての命あつり  
あひらきしるしるの命あつての命あつり

あひらきしるしるの命あつての命あつり

あひらきしるしるの命あつての命あつり

あひらきしるしるの命あつての命あつり

あひらきしるしるの命あつての命あつり

あひらきしるしるの命あつての命あつり

あひらきしるしるの命あつての命あつり

あひらきしるしるの命あつての命あつり

あひらきしるしるの命あつての命あつり

あひらきしるしるの命あつての命あつり

あひらきしるしるの命あつての命あつり

あひらきしるしるの命あつての命あつり

あひらきしるしるの命あつての命あつり

あひらきしるしるの命あつての命あつり

あひらきしるしるの命あつての命あつり

あひらきしるしるの命あつての命あつり

あひらきしるしるの命あつての命あつり

あひらきしるしるの命あつての命あつり

あひらきしるしるの命あつての命あつり

〜さしれん

秋の夕 梅のうらとてひり寄持也

あ〜もえとりのや〜と 楽ガク意キある〜

〜のほとの〜 夕暮の三葉文乃〜

ひの暮さ〜 急の梅〜ひり〜

柏木峯に〜一葉文を〜ひり〜あよ二村

為の〜れ〜ぞよひり〜て雲れ絲さるん

秋の夕〜とあり引合〜さるん〜

甲らふ志〜人 秋乃志〜人のあつ〜

篠ハ女によ〜り

〜うららあ〜りよ 夕暮の〜吾身は實

流なるあま〜り

ぬきのつねよ け悪ハ柏木平生り〜

〜の〜

けは〜も 女二文の由縁今の音あを柏

本れあ結いあ〜りゆる〜んと也

〜の〜 由縁おの解意考ゆん

〜の〜ま〜とま妻あれあ〜りひ〜と〜

〜の〜あ〜

女文道 女二の文ハ〜あ〜い〜

〜と〜

世の〜い〜 浅茅すれ〜と際うあよ



玉露をよれしむらひのさき  
 こしあどひんも栞木のゆき  
 あらん一輪のうらみ  
 其の吟想も事いふれ  
 此是のよれはあなを  
 こころやりの 夕霧の相  
 こころいふあれ 影のよ  
 栞木とよあをえ下  
 影のよれをりこ  
 志のそよひ  
 夕霧の相より

みをさうふあさ  
 暫明<sup>ナカト</sup>

琵琶<sup>ヒナ</sup>のよれ  
 琵琶<sup>ヒナ</sup>のよれ

志のそよひ 用さ  
 月さうのそよひ 夕霧の相  
 つよとよめれぬ 雁<sup>カキ</sup>不<sup>ス</sup>乱<sup>ミカ</sup>行<sup>ラウ</sup>之心也  
 さうのそよひ 和琴をよれ  
 感よるんて 華をよれ  
 さうのそよひ 夕霧の相  
 さうのそよひ 夕霧の相  
 さうのそよひ 夕霧の相



しほよひのこころのちかきつらき  
あはれはなほいづれか  
てはなほいづれか  
あはれはなほいづれか

あはれはなほいづれか  
あはれはなほいづれか  
あはれはなほいづれか  
あはれはなほいづれか

あはれはなほいづれか  
あはれはなほいづれか  
あはれはなほいづれか  
あはれはなほいづれか

あはれはなほいづれか  
あはれはなほいづれか  
あはれはなほいづれか  
あはれはなほいづれか

横笛の 横笛の 横笛の

あはれはなほいづれか  
あはれはなほいづれか

あはれはなほいづれか  
あはれはなほいづれか

あはれはなほいづれか  
あはれはなほいづれか

あはれはなほいづれか  
あはれはなほいづれか

あはれはなほいづれか  
あはれはなほいづれか

いざなりをりり

あふみのつれ

あふみのつれ

あふみのつれ

あふみのつれをりりあふみのつれをりりあふみのつれをりり

あふみのつれ

あふみのつれ

あふみのつれ

あふみのつれ

あふみのつれをりりあふみのつれをりりあふみのつれをりり

あふみのつれ

あふみのつれをりり

あふみのつれ

あふみのつれをりり

あふみのつれ

あふみのつれをりり

あふみのつれ

あふみのつれ

あふみのつれをりり

あふみのつれ

あふみのつれをりり

あふみのつれ

あふみのつれをりり

あふみのつれ

あふみのつれをりり

あふみのつれ

あふみのつれをりり

あふみのつれ

あふみのつれをりり

あふみのつれ

あふみのつれをりり

あふみのつれ

あふみのつれをりり

あふみのつれ

かよせの寺

段仕大后方の寺なるべし

寺ありとに准<sup>ビシク</sup>友のうつくさなるあり

佛のるり

佛も施きんもいふ

女清

ゆゑの女清

三交

白宮也

いふいよ

はつと也

ちおこ

三交ちおこよびての給ふ

ちおこ

我身と由身とがた

けりなきふの給ふ

ますれま

ちおこの言れはま

けり

ちおこの給ふ

まろく不かくさん

ちおのく不ぞ人らもぬ

ちおこ

二交の ぬねの女清れはく入海りての事

まろく不かくさん ちおこ

てん女三交をれ申の程なるぬね女清のちおこ

おろしやのほよみはりや ぬね

細がの海より結敷別をいふのちおこ

打ちま

源

ちおこのちおこ

ぬねに源々舞れはるの給ふ

海り給ふんと

源はくこの言入海り給ふ

ちおこのちおこ

ちおこの也

なげのうきり

なげよみしり

あまのうきり

なげ物木のうきり

てしる人ふなり

まのいふ

眼中也

ちりり

致仕の土居

いそいそ

なげれ公よ打入りしり

いそ

はまごのゆき

夜登りの一階れ

なげの源(物語あり)

りりり

なげれをたをたのり

むしり

あつたのりしり

いそいそ

源の語(表行あり)

おしりしりしり

女れ

なげれをたのり

あしりのり

なげのゆき

のいそいそ

なめれ

なげの語

あしりのり

今しりしり

のいそいそ

いそいそ

なげれがしり

あしりのり

いそいそ

なげ物木のり

あしりのり

海におかれ

我身実けつらひのこころいふ

うらまへしつらふかたまり

ふれ愛れり

苗代事也

切なりあたま

源け苗をうけつらふ

おどろきの文

桃園うらへしつらふ

よとまへしつらふのふけしめ葉せつらふ也故と

いふまへしつらふ也

末代世

源代也

けさめ

夕霧もけさめあるへしつらふ推しつらふ

今もこの世つらふ

今もこの世つらふ

とつらふ

柏木終季のふらふつらふ

されいふ

源代もつらふつらふ

いふいふ也

志る人の

源乃籍

あつらふつらふ

とつらふとは又例のつらふ

源代な利

明徳集三十七

鈴虫

卷名以歌并詞号之源氏五十歳夏より

秋までの事也豎並也

あつはらちすれ花のさうりに 六条院池の蓮

入道の姫女 女之まゝ也

けなひかしの志 持佛とせしれをれもの

未念痛堂いひぞささるるあり 六条院にて

深の悉皆一終る也

めそめ 深つら所物

よるれらちやう 佛壇よむまへより

よりそあう 四方の帷とわが所



曼荼羅、朱名義集七滿荼羅、此翻壇新  
云正名曼荼羅、

蓮花をくへ

かたは百ぬの 廣の方をくわえせらるる七

朱名義三香是離穢之名人中臭氣上熏於空

四十万里諸夫清淨無不厭也

きうの菩薩 脇士觀音勢至也

觀經無量壽佛住空中觀世音大勢至是二大

士侍立左右

うえりのわり そ八日中此方也

みちとわり 蜂窠之くまらぬあは蜜此入

と蜜とのぶさくろるなりなりくくく

強香なるにうりて蜜と暑をゆれ

ちつちつのゆらゆら 女に交れ持強こ

これをさふ 沸と女に交れ今世の繋り

いすく成らあまりて

とくくくく ちくくくく

こぬいよに流のくきく 海は自身乃強こ

別は置てそれ外の導師のまよあるへ

そくくくく ちくくくく

くせらの 海況じんくひそくにして

難受あるへと也

志のめて文あゆまの まつらんへの用えを

いふまじりの女にまゝに種々のあつていふまじりたつて  
せたまふまじり

あまのまじりつら 女にまの夜乃たまりのまじり

煙にまのまじりつらまじり

えらり守る所 五會讚エノサニ一々池中花盡ケシ浦花々惣

是往生人各留半座乘花葉待我エニ閻浮同行人

といふり今別よけり所病のまじりつらまじり

こうそめ 尼乃廟ニノミヤ

つらまじり 女にまの奇の海北あけせよとめ

あまのまじりつらまじり

七傳 朱講師カウシ讀師ドウシ咒願ユヅクシ三禮サイレイ唎ライ散華サンカ堂達ドウダツ

ひらりつら 弟の地ニノチ

ゆいけつらまじり 辨舌ベンゼツあれた也

これいへまじりつら ゆいのまじり也

院インまじりつら 六条院ロクジョウイン

まじりつら 省略ショウリョク也

ゆいけつらまじり 巾布キンフ袍ホの多まじりつら 海鏡カイキョウまじり

めり何ふのまじり面白オモシロイ書カキ下ゲ也

朱車シュ疊タガヤ煙エン嵐ラン之ノ斷處タンジョ晚寺エンジ僧歸ソウキ

まじりつら 海をへまじりつらまじり

まじりつら也

院のみとよ

朱雀院也三条宮とも結構なり

がうまうりーまうすしてまうり

町のまうり

まうり

ゆてーまうり

まうり

まのまうり

源也

まのまうり

女三まうり

十五夜のみ

まうり

別あり

秋のまうり

源のまうり

中文

まうり

まうり

まうり

まうり

まうり

まうり

まうり

まうり

まうり

まうり

まうり

まうり

まうり

まうり

まうり

まうり

まうり

まうり

まうり

まうり

月さし出せ およまほしむるわづらひの夕

言とわづらひもそとらぶらむ也

いしつ連くもそ 湯れ初也

うられはまよ 肉の所也

月さし出せの夕とそ 三五夜中新月色

いしつ連くもそ月さめ秋の夕を日たす也

よひのめり〜まじり也

故大納言 柏末也

いしつ連くもそ 湯れ初也

寺の月 湯の夕也女三つははらむ也

とらりぬる也

はせんのはあつひ 是らりの夕家院よりはせり

そとありもそ湯よそみ地をそりた大弁の也

梅の夕〜或は大納言系圖よりの

あつひの夕 院よそ〜まじり也

物早れもあつひの夕はすれぬ也

わづらひの 秋の夕と花の夕とあつひの

いしつ連くもそ〜そらむの夕あり日〜

湯れ初也

月さし出せ 湯れ初也 湯れ初也

是らりの夕はあつひの夕とあつひの

湯れ初也

人への御車 冷密のえんよとあつさん也  
あつつまでと像もあつたつと

左馬守 致仕大臣の子之系圖よぬおは  
の親も有り

うぬりあつたよ 源の孫をかじつ也  
孫のよのひ 冷泉院のゆさぬ

かたへあつた 感<sup>サカ</sup>たれ世をすすこぶ  
任行つるかど人とも也

中々これ地方 秋好  
今かう 源れ親

あつとつぬ 院号あつたつてあ

とつぬと早下の箱

さつと 我どひろがたつて  
悉皆残つて海のよのよけつと

あつた 秋好れは  
あつた 秋好る箱禁中そつと

隙もあつてお集院す細くあつたつと  
あつたつと 皆人のつと果あるを

それのうら 何れをの源をたつたつと  
けふとつとつとつとつと

けふとつとつとつと 源れ親



物名也

命の良也

目連<sup>モクレン</sup>佛よき

目連救母經ハ偽作<sup>ギサク</sup>の經也只孟

蘭盆<sup>ラハボン</sup>經ふもよりを此とい佛は親<sup>シン</sup>を<sup>ゴ</sup>する也

やうくさゆはらき

かこらと入行りす

漸くふちうし志あけんと

あつひ終る

海とさやとく

於やうしめき

弟も地

妻の女侍

ゆき女は母の終りと冷泉院と

女侍夕霧よりも於大物よとのまうと也

院もつり

冷泉院

なふ事

秋好中文の海是也

夕霧

卷名以歌号之源五十歳鈴虫ハ八月十五夜

まんと書りけ巻ハ終虫の巻れまより十

二月まんとせり

海人の名はたり

夕霧実法なる名とれ

終るよと

消息

藤原文の母文も前

たつめり

夕霧れの中也

あつひ

女三女の書終るのいなり

あつひ

終るよとせり比叡山<sup>フモト</sup>禁

惟<sup>ユ</sup>親<sup>カ</sup>王の位終つたわはありなり

はいのりれーま

河海惠心傍船と引

其氣よるぐうづの良平生海依れ人あふ  
をたゆり 柏木の足舟とゆり

舟の志 柏木れうつこの舟へ柏木遠

せー人紅梅乃おこ也

けまの 夕暮

まそゆり 女二まゆあふようそりて

ぬああり

いあくみまかりー 夕暮れ

あれ方 雪舟也

こつりーそ 夕暮の也

輝のまきつさ けまをづまそとそりて

切てらるー是まそいたもぐうそり

船にああゆ 是よりいあ船の山莊也朱箋

日ころあさあーぶつたとそり山莊れり

あいありーます 文いあまのーせとの路ひ

人ようりらるま 物のまれひとそり

ー魚とそぬ路つこ

いかにけり 文とあのか人傳れ

海せぬりー 夕暮の船傳をそり

とーかぬ かり船乃機あのは

さりり 女文と推量ー路り



あめいばちかうそい 石巻の石巻に  
あめのおお かわるんはきおれよいのたかす  
かろうとくは葉文れいこなるー

かきあかり 夕霧の相し

後述と 柏木の後三ひよぬる也

齧つりす 夕霧そらあどいよあれはらふ

よりそかへしーとあきせぬやふよひのこゝろ  
たしあまーあやとなり

あめいばちかうそい あれしてふま古抄傳へ  
後り文れ出るところめるさへ夕霧の自歌くら  
あつみ情とあつて堪ぬとあつていひあつていひ

あめいばち せだよりぬるのうらみ事  
なつりうらみよとくのうらみ

あつみあつめ 文のほろしーとけはは葉  
のうらみ

いひあつていひあつていひ 夕霧

いひあつていひあつていひ 夕霧の相し

いひあつていひあつていひ 文のほろしーとけはは葉

いひあつていひあつていひ 夕霧

いひあつていひあつていひ 文のほろしーとけはは葉

いひあつていひあつていひ 夕霧

いひあつていひあつていひ

しん色も井くらると

あめ砂河をひきん

よじら海うり

お路りん 夕暮也

まりのこ 夕暮のしん

ますせんか 夕暮の類

夕暮の 夕暮れ名とあまり夕暮れ名

夕は秀逸うり

ふらの 二文のぬいおそなるうり

ふらふらうり夕暮れくわあま

あつちあまうり夕暮れあま

中夜なる 夕暮れ羽音の海をかよとら

あつちあまうり 夕暮れあまうり

あつちあまうり 夕暮れあまうり

あつちあまうり 夕暮れあまうり

あつちあまうり

あつちあまうり

あつちあまうり 夕暮れあまうり

あつちあまうり 夕暮れあまうり

あつちあまうり 夕暮れあまうり

あつちあまうり 夕暮れあまうり

あつちあまうり 夕暮れあまうり

みちる〜

夕音の箱

いしりめ〜

文を承れは音のあめん

ゆ〜

ゆせ〜

ゆきあふり文のゆ清き也

あ〜

ゆせ〜

あ〜

夕音の箱

あ〜

夕音の箱

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

夕音の箱

あ〜

あ色のたよ〜

あ〜

あ〜

夕音の箱

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

世の中をひらきよ 柏木にふれぬ心に世の中を

あつたき路にふえよの如く

あふまひついで 高葉の文は

うらみあし 文の如く

我の心や 世の中をひらきよあつたき路に

いよわいしと文書方の心路に

あつたき路にふえよの如く

我をうらみあし 世の中をひらきよあつたき路に

あつたき路にふえよの如く

うらみあし 文の如く

世の中をひらきよ 柏木にふれぬ心に世の中を

あつたき路にふえよの如く

あつたき路にふえよの如く

うらみあし 文の如く

世の中をひらきよ 柏木にふれぬ心に世の中を

あつたき路にふえよの如く

あつたき路にふえよの如く

院へも 朱雀院へ

清まらや 夕暮の如く

朝露の如く 文の如く

うらみあし 世の中をひらきよ

あつたき路にふえよの如く



さうら 文乃侍

なまのぬま 心あふく魂たまもあふれて出

わつたり物い 別と捨ていふや志よをんやあり

おろの物いふかたり

ひろ方志す 夕暮れ心やの方なること

何ふおつきても 夕暮の志の世のさうら

くた方り いせれこと

大日如來 律師自歎也

こう志わう 花鳥の祝のあり 業障也

そふやこれちね さいこあふくか書出

ほふなり

そあふこと 法師の稽れは海へ音かたり

まう新抄こと

せらふあぬ 大切もあぬ也

古大交 夕暮の祖母也

かんさし 重井なる也

さるあふの心さうあふ さいあふさふとあふ

んこれえ 女二あふ

いその解さ 交をあふ

人乃あふり 物えんあふのさ也

いそあふら 夕暮乃事也

けりあふす 省畧也

交をながのふ あつたまへかかむのほろ

事なり

物もの給ふて 交まき

こまらむ おお交まておれ極をこまらむ

まもあてと 交まの緒

まひらう け交ま何いしてまひらう

なすてはと

ますう物まゆる けらり際わうてま今

ああう物出あれと

しほりて 女交らけら

あこれ 脚の気也

物まをくう けこれまのへまは

ゆんをうこのあせ

けほとやれめ けまおまけらやせり

なけい給る 交まおけらうとあまい人

給らうまのこま

されまよ 女交のほら也

けまのま 物まはまおまけらうと

これ人 女ま

まひらひらひあ 女まおまのま

まひらひらひあ 女まおまのま

まひらひらひあ 女まおまのま

まじあぐまみ給よと人此とらん言あつ  
うけりお成めらんよ人 皇女あらん  
いづよとて給あめりまもよいけ女舞あ  
こ入いぞとていん也

中乃めりこめ 田カタク乃らり海り給り

いそみりらうへ 美まの相

後うあす 美まの舞サウクイいり那ーと

又めりりまらるた 美まのいづらう

まりまらるるす也

くもーいませ 美まのいづらう

今らと舞ーいん也

おつこも 美まのいづらう

おつこも

くもちの 美まのいづらう

人まれもあり 美まのいづらう

美まのいづらう 美まのいづらう

れまのいづらう 美まのいづらう

くもーいませ 美まのいづらう

清まーいん 美まのいづらう

せくーいん 美まのいづらう

美まのいづらう

こまのいづらう 美まのいづらう



大の方此志うとありきりふし

大との海り 雲井居るなれとのけりて

早り此れ乃 文もあつていれ

きこののけ ねる女文は是の所方に

ましますと

とまると 此志のま

くゆめきりや 物此のま

とりのんとする

云系院乃ひん 花霞里

さ月ふささ 雲井の居る

おまゝいひく 夕暮

まふ方あ 人独りを海り

あまゝいひ ありて多き中

くはより船の事

箱のなひ 竹取うりの守株

とれまゝい 愚癡乃ち

なきつりさん 簡してさん

いし白ひやふ 雲井居る

ありあかん ありはる物

うねてより 道てより

まぞ俄う物

俄う 夕暮の相何

くみしりの種 ちいあつてのほひく  
あひなさいくはほいめ 女房はあはれ  
うらうー

しうーあつてい けいよあつてい  
このほひがらあり

たま乃乳母 せせの乳母あはれす  
とらうー人なり

あつてい 不承取  
我も今あつてい  
あつてい

あつてい 女房今あつてい  
あつてい 女房今あつてい

みやまうせ 女房の箱

いそれらうせ 世はあはれの人  
よひとら 女房の箱

け女房あはれ 女房の箱  
朱まうせとらうのあつてい

あつてい 女房の箱  
あつてい 女房の箱

朱仰云興うーとらうのあつてい  
あつてい 女房の箱

あつてい 女房の箱  
あつてい 女房の箱

あつと日ハ坎<sup>カ</sup>日<sup>ニ</sup>あれバ俾<sup>サ</sup>あつとく

いそめん〜さ 文の相く

けい〜め 一巻其花のさし

秋のこれ 実のあ〜と〜ふり〜計え

花<sup>ハ</sup>結<sup>ヒ</sup>び〜事いあ〜り〜

ふのつ〜ひ〜も〜り 一巻換つてはあ

とも〜や〜と〜り〜り〜さ〜え〜ぬ〜と〜り〜

〜飛〜と〜く〜

一巻の〜ら〜り 一巻其花のさし

後代あ〜し 文とあの方より文とす

ひ〜あ〜ど〜あ〜あ〜ん〜す〜ん〜

中〜〜〜 女〜あ〜何〜と〜え〜ぬ〜

あ〜の〜あ〜〜〜〜り 一巻其花のさし

秀<sup>ハ</sup>あ〜〜あ〜〜〜〜

今まよ 一巻其のさし〜

そののあに 一本よ遠路ひ〜事〜も〜よ

つ〜ず〜と〜あ〜り

我はあやまち 院の定めはひ〜り〜あ〜れ〜

い〜〜〜〜り 夕秀れり也

ふれさのあ〜〜〜海 夕秀念路よ〜た〜も〜あ〜

情うれんれ 夕秀け〜一巻〜後〜と〜あ〜

行な〜ら〜り也

をーこめて 実りのまゝをーこめて  
のねのうり

あやまれば人 一歩計の首をうりせんのもれは  
こんこりち 大目め来そつりちねりずの

あざいひーいど其<sup>たは</sup>蹠も存<sup>たは</sup>兒之定業<sup>がま</sup>に限<sup>ゴラ</sup>わ  
はるのけ<sup>だ</sup>物<sup>が</sup>炊く<sup>だ</sup>強<sup>が</sup>方<sup>が</sup>も<sup>が</sup>如<sup>が</sup>就<sup>が</sup>不<sup>が</sup>ぬ<sup>が</sup>親<sup>が</sup>を  
よくあちり<sup>が</sup>悉<sup>が</sup>皆<sup>が</sup>世<sup>が</sup>る<sup>が</sup>れ<sup>が</sup>ま<sup>が</sup>は<sup>が</sup>ぬ<sup>が</sup>

あけぬせうそい 山の口はせうそい  
白<sup>は</sup>比<sup>は</sup>也 是よりぬみ乃<sup>は</sup>親也

つねよさそあめ 山<sup>は</sup>思<sup>は</sup>水<sup>は</sup>造<sup>は</sup>る<sup>は</sup>よ<sup>は</sup>久<sup>は</sup>お<sup>は</sup>お<sup>は</sup>一  
垂<sup>は</sup>ぐ<sup>は</sup>は<sup>は</sup>を<sup>は</sup>ぐ<sup>は</sup>て<sup>は</sup>あ<sup>は</sup>め<sup>は</sup>よ<sup>は</sup>こ<sup>は</sup>ま<sup>は</sup>ー<sup>は</sup>也

今日より後 夕<sup>は</sup>芳<sup>は</sup>也

ゆーもふ ち<sup>は</sup>う<sup>は</sup>い<sup>は</sup>そ<sup>は</sup>ぐ<sup>は</sup>ぬ<sup>は</sup>也  
微<sup>は</sup>氣<sup>は</sup>を<sup>は</sup>引<sup>は</sup>て<sup>は</sup>て<sup>は</sup>こ<sup>は</sup>り<sup>は</sup>也

あ<sup>は</sup>の<sup>は</sup>こ<sup>は</sup>い<sup>は</sup>せ<sup>は</sup>れ<sup>は</sup>ぬ<sup>は</sup>枝 時<sup>は</sup>務<sup>は</sup>の<sup>は</sup>結<sup>は</sup>也  
よ<sup>は</sup>う<sup>は</sup>ー<sup>は</sup>う<sup>は</sup> 是<sup>は</sup>より<sup>は</sup>夕<sup>は</sup>芳<sup>は</sup>此<sup>は</sup>親<sup>は</sup>也

あ<sup>は</sup>よ<sup>は</sup>こ<sup>は</sup>い<sup>は</sup>の<sup>は</sup>親 昔<sup>は</sup>い<sup>は</sup>ま<sup>は</sup>と<sup>は</sup>親<sup>は</sup>る<sup>は</sup>り<sup>は</sup>より<sup>は</sup>り<sup>は</sup>是  
あ<sup>は</sup>よ<sup>は</sup>こ<sup>は</sup>い<sup>は</sup>り<sup>は</sup>色<sup>は</sup>親<sup>は</sup>よ<sup>は</sup>申<sup>は</sup>白<sup>は</sup>相<sup>は</sup>也

あ<sup>は</sup>よ<sup>は</sup>こ<sup>は</sup>い<sup>は</sup>り<sup>は</sup> 交<sup>は</sup>を<sup>は</sup>あ<sup>は</sup>い<sup>は</sup>た<sup>は</sup>お<sup>は</sup>の<sup>は</sup>の<sup>は</sup>ゆ<sup>は</sup>い<sup>は</sup>ま<sup>は</sup>い<sup>は</sup>も  
あ<sup>は</sup>よ<sup>は</sup>こ<sup>は</sup>い<sup>は</sup>り<sup>は</sup>路<sup>は</sup>の<sup>は</sup>ー<sup>は</sup>と<sup>は</sup>交<sup>は</sup>い<sup>は</sup>あ<sup>は</sup>ぬ<sup>は</sup>也

あ<sup>は</sup>よ<sup>は</sup>こ<sup>は</sup>い<sup>は</sup>し ち<sup>は</sup>あ<sup>は</sup>ぬ<sup>は</sup>人<sup>は</sup>ー<sup>は</sup>也  
あ<sup>は</sup>よ<sup>は</sup>こ<sup>は</sup>い<sup>は</sup>と<sup>は</sup>あ<sup>は</sup>い<sup>は</sup>あ<sup>は</sup>ぬ<sup>は</sup>わ<sup>は</sup>の<sup>は</sup>は<sup>は</sup>ぬ<sup>は</sup>と<sup>は</sup>あ<sup>は</sup>ん<sup>は</sup>と<sup>は</sup>よ<sup>は</sup>み<sup>は</sup>切<sup>は</sup>一

海にせ給う

乞ふり夕暮八戸廻

の御母一歌

夕暮れはゆふさひなをらふ

竹ひらやたり

葬礼

こころいし

世系あれ

うらみそくして

文正の飛降カゲノやとら

後乃ゆつこ

畏コトひれまら

大文うせ給うり

夢上の母と夕暮昔は

をよみ出給へ

申し合給う

後仕大臣よりと海軍

心給あり

二擲り

大言よりも柏木とら給へ

一と音うのくちあひを海軍の

すり人いふと物よ

女系 せ井なる

あはれ女に文くまはる文よ

あはれ女に文くまはる文よ

あはれ女に文くまはる文よ

あはれ女に文くまはる文よ

あはれ女に文くまはる文よ

あはれ女に文くまはる文よ

あはれ女に文くまはる文よ



作方うろくへとせ

作のすゝめ 院へ

まのいかに家内別る

世方ちよりなる地あり

柏木よ別れし路ゆきのあまぬしにんじん

文をその別しこ

我とてあや

秋をたふしよむる兼よ

吾をなすあやや拙ありよ

里を

よのたれりし愛のあまふあり

乃ららむらり

あり夜

かねのきれき

今らく

女二れはむし

十三日

あつち

いあよなるく

あつち

大御言

柏木乃し

みーくの

とのあつち

あまとの

あつち

あまのあつち

あつち

あつち

あまのあつち

あつち

あまのあつち

あまのあつち

約めしよふはなまのしんもみら後り  
 うらりありあやむ 一さかしてのよふん  
 よのひれふよりあつきのあつきのあ  
 居るうらりあひ一はしん  
 はぬりよふいふ 雲井居のあし  
 しんあいの 小あねうあひ  
 あつきのあひ 夕暮れよよあひ  
 目あしあひ 一は後う一はひ  
 あひあひ 暮るのれはあひ  
 のあひあひあひあひあひあひあひ  
 とあひあひあひあひあひあひあひ

續ツキのらせても也暫時は書控ふらに  
 らあひあひあひ  
 はあひあひ かんあひあひ  
 うらら 奉らそふたは 慚シヤ愧ギのてい  
 あああひあひ 後仕方居れか  
 書と書井居のほふあひあひ  
 はあひあひあひ 雲井居のあひ  
 女んあひあひ 雲井居のあひ  
 世の書ふあひあひ  
 のあひあひあひあひあひあひあひ  
 あああひあひあひあひあひあひあひ





女うされ公のいせ

致仕大后のふき書一紙

ひて夕暮の實人なれに女交れ四方のいあ  
いれたるものいさくさる

いれいせよ お梅に大后のいせ

いさくのいせ 母よ用らるるいさくはに

いさくいせ ちかきいさくはにいさくいせ

いさくいせ 出雲のいさくいせ

いさくいせ ちかきいせ

いさくいせ 白鳥のいせ

いさくいせ 人いさくいせ

いさくいせ 草紙のいせ

いさくいせ ちかきいせ

いさくいせ ちかきいせ

いさくいせ ちかきいせ

いさくいせ ちかきいせ

いさくいせ

いさくいせ

いさくいせ ちかきいせ

いさくいせ

いさくいせ

いさくいせ ちかきいせ

いさくいせ







あゝぬとあの相どうもそとあゝこれのま  
ましくあゝぬとあゝぬとあゝぬとあゝぬと  
てよみまゝりて

●とりりん つかんもとりりんと云語を  
うもそとつせが其理りかどあゝあゝんずん  
と也 右丸四ハ天文八六二日對宗也讀之時用  
此義也

これもしつまたよ 文れ水色

うんりじにされちよける さあぬん  
ゆとりれちり 夜雌雄ヨシノヲ一なり孫ざる也  
徳宿トクヨクの事よとり

ハハハハハハ

ハハハハハハ 物ぞいふえんと

ハハハハハハ 雲れ雲いふハハハハハハ

ハハハハハハ 雲れ雲いふハハハハハハ

ハハハハハハ 花ちり雲の相

ハハハハハハ 花雲雲の相

ハハハハハハ 夕雲の相ハハハハハハ

ハハハハハハ 文を命造云ありハハハハ

ハハハハハハ 二文ハ

ハハハハハハ 尾りぬ給ひて

同一事なるハハハハ

院乃 深ふもくや終てと

人のいひりり 花叢里の朝

三葉北指云 雲井なる朝

らうらきあも 夕霧の朝

はあり様もいしく 深れ地をへまらり

あまこや 人へあをほへとあまこ

みとあゆみやと

南れおこ けあこ

この地方 花叢里

こころあこころさ 夕霧北ふゆのこの終り

て深の秋水うらむら指雲流ゆるりあまこ

さるんつのみ 夕霧の朝まののやまもは

るの姿初あつと

おまこり 深れあまこ也

とれよ 三葉を交へ

いひこよと 雲井なる朝

はこよう 夕霧の朝也

めそいひまもた 雲井なる朝

ういあまひよ 夕霧乃朝

かり〜〜い 終〜〜いと 未 鬼邪めさ

恐あつたもをそ〜〜いあそら〜〜あゆみ

あまのつゆを 雲井なるの朝書也あまの

みよの真しきあり

さしも染りあくなる 夕霧にのほのほ

ひねとの露のちりぎりすかきかきならぬあま

あまのついで

いしつらやうに 夕霧なるを清なる人なり

うきもの

今日もほろり 夕霧もせほろり

あまの 夕霧なるを夕霧なるもあまの

じつじつ 夕霧のついで

夕霧のついで 夕霧のついで

夕霧のついで 夕霧のついで

あまのついで 夕霧のついで

夕霧のついで 夕霧のついで

夕霧のついで 夕霧のついで

夕霧のついで 夕霧のついで

夕霧のついで 夕霧のついで

夕霧のついで 夕霧のついで

夕霧のついで

夕霧のついで

夕霧のついで

夕霧のついで

夕霧のついで



うらひさき くれさく 後路のいさす  
わくこいさく 一条さく

うらめあつさく 文書乃玉芳のいさす

紗のいさく 後路のいさす

あつめいさく 文書乃玉芳のいさす

あつめいさく 文書乃玉芳のいさす

あつめいさく 文書乃玉芳のいさす

あつめいさく 文書乃玉芳のいさす

あつめいさく 文書乃玉芳のいさす

あつめいさく 文書乃玉芳のいさす

あつめいさく

あつめいさく 文書乃玉芳のいさす

あつめいさく 文書乃玉芳のいさす

あつめいさく

あつめいさく

あつめいさく 文書乃玉芳のいさす

あつめいさく

あつめいさく

あつめいさく

あつめいさく 文書乃玉芳のいさす

あつめいさく 文書乃玉芳のいさす

あつめいさく

女あはれ 文をいあぶりのほろい

あはれい 夕暮方のほろい

あはれい 夕暮方のほろい

あはれい

あはれい 夕暮方の相い

あはれい け句あは生後の句い

あはれい せみなるれほろい

あはれい 夕暮方の相い

あはれい 夕暮方の相い

あはれい

あはれい

あはれい 夕暮方の相い

あはれい

あはれい

あはれい

あはれい

あはれい

あはれい

あはれい

あはれい

あはれい

あはれい

に誓りのあはるるかよのり

ねえありー けあつふいふのねあつー

あつーあつー

うーうー 内中をたふへ

まのつあれあつー ねあつー

あつーあつー せんー書つたるふーあつー

うーあつーあつー ねあつー

あつーあつー ねあつーあつーあつーあつー

あつーあつーあつー

あつーあつーあつー ねあつー

あつーあつーあつーあつーあつーあつー

内中あつー

ナイゲ

大敵のまの

雲井なる

内中あつー

あつーあつーのあつーあつーあつー

あつーあつー

あつーあつーあつー

あつーあつーあつーあつーあつー

あつーあつーあつーあつーあつーあつー

あつーあつーあつーあつーあつー

あつーあつーあつーあつーあつーあつー

あつーあつーあつーあつーあつーあつー

あつーあつーあつーあつーあつーあつー

明和の文藝書

人れよあ 我れ人のうまて我れにん

てらあのんぬとく

あやせむる 若の侍れをけのめけあかしく

けれけらあ 毛井なるれぬ版く

ひんこのあこ せらの書く

らひあぬこあことえ 例の佐若れ評く

